

まま死ぬということ、人間として耐え難い矛盾のよう
に思えた。生きたいと思った。どうしても死ななけ
ればならない運命であるならば、せめて日本の土を踏
んでから死にたいと思った。このシベリアの奥地の密
林地帯の静寂の中で、誰にも知られず、ひっそりと葬
り去られるということの悲惨さを思うと、身体がひと
りでおののくのであった。

もう燃え尽きたと思ったとき、歩哨が帰ると言う。
その歩哨の「ダワイ」の声に押されながら、凍りつく
雪道を無言で帰途についた。

応召地―秋田県、昭和十三年九月、臨時召集により歩

兵第十七連隊留守部隊

昭和十八年十月、充員召集により第一〇五連

隊（秋田市）に応召

転属―昭和十九年三月、新京独立守備歩兵第二七大

隊

七月、第一四国境守備隊、在鳳翔

昭和二十年七月、一三四師団司令部、佳木斯

武装解除―方正

入ソ地―レーニンスコエ

抑留生活をかえりみて

愛媛県 青木 明

終戦直前の昭和二十年七月二十日、北満州黒龍江省
嫩江街で、半官半民の特殊会社、満州自動車製造株式
会社専属工場の支配人として働いていた私にも召集令
状が届きました。これが、国境付近にいた日本人男子
全員に来た最後の召集令状だったので。

現地に妻や子供を残し三日後嫩江部隊に入隊、すぐ
ゲリラ戦の遊撃隊に編入されました。兵舎にはこれと
いう目ぼしい武器もなく、毎日匍匐前進と木銃による
訓練のみが行われ、関東軍の精鋭部隊が南方や沖繩方
面に派遣された後の手薄な残留部隊は、対ソ連との戦
争には数の上でも全くお手上げの状態でした。

突如始まったソ連軍の満州侵略に対抗してごく一部

の国境部隊が銃撃戦をしたくらいで、殆ど戦争という戦争はないまま、関東軍の組織はソ連軍の前に戦わずして降伏しました。在留民間人や婦女子等を保護してくれる日本兵はなく、ソ連軍はほしのまま略奪や婦人の凌辱を重ね、全く地獄と化してしまつたのです。

ソ連軍は、私達残留の兵隊や元氣な民間人に対して、シベリア經由で日本へ帰国させるとの欺瞞のもとに、尉官級の将校を隊長として千人くらいを一大隊とし、九、十、十一の三ヵ月ほどで約六十万もの日本人を戦後復興のための労働力としてシベリアの地に無手勝流に追い込んでしまつたのです。彼等の、大連や奉天等はアメリカと朝鮮に占領されたので満鉄では帰れない、お前達はできるだけだけの品物を持ってシベリア鉄道で帰国するのだという計画的な謀略に、日本人はまんまと乗せられてしまつたのですが、それを見抜けなかつた関東軍上層部の無能による失敗としか言いようがない降伏の有様でした。

入ソ後も旧軍人達は、日本に帰れるまでは天皇の軍隊組織を維持してゆくつもりであつたようでしたが、

日本に帰るところではなく、ソ連側の苛酷な強制労働と食料不足による飢餓、その上に設備の悪い宿舎で零下四〇度にもなる厳しい寒さに耐えられず、逃亡者や病人、負傷者、死人が続出する有様で、その殆どは直接作業に従事した第一線の下級兵士達のみが犠牲となり、無念の涙を飲んで死んでいきました。死者の数は約六万人、その半分以上は、入ソ後一年以内にその犠牲となつてしまつたのです。

私達が連れて行かれたのは、満州漠河の対岸と思われる密林地帯に作られた収容所で、元白系ロシア人がいた強制労働収容所の跡でした。毎日朝早くから夜遅くまでの重労働に耐えられるはずもなく、真つ先に私は動けなくなり、働かざる者は食うべからざるの共産社会では食べる物も少なく、附近の民家で飼育している馬の凍つた糞をポケットに入れて持ち帰り、シベリア特有の粉雪を飯盒に入れてペチカの上で溶かしきませ、底にわずかに残る消化してない大豆の粒を丁寧に宝物のように水で洗って、飯盒の蓋で煎って食べた、馬鈴薯一個と岩塩を雪水で溶かしてスープにし、

一日の飢えをしのいだこともありました。

そのような日が続くはずもなく、私の体重は痩せ細り三十八キログラムほどになって動けなくなり、特別八八八陸軍病院に入院することになりました。この病院で九州の蒲原兄に会い、半死半生であった私を看護して下さって万死に一生を得たのです。一緒に入院する戦友十六人中、入院輸送の途中の貨車の中で凍死十二人、四人入院して二人死亡という最悪の状況で、全く生きていたのが不思議なほどでした。

病院生活で翌年の春には奇跡のように回復し、今度はクイブシェフカの第三分所に行くことになりました。

その頃の第三分所はまだ旧日本軍隊の秩序が保たれており、みんな階級章をつけていて、将校や下士官達は立派な身なりでしたが、大部分の下級兵は痩せ細り、無気力で、ダモイ東京と食べ物話のみにて希望のない毎日を送っていたのです。将校は作業免除で特別食、下士官は作業の監督、食事も兵隊達より良く、一目でわかる旧軍隊式差別が行われておりました。

私は、一緒の草田君とよく話が合うので、日本は戦争に負けたのに未だ階級章をつけて差別があるのはおかしいのではないか、星一つで人間の価値が違うのは、昔の軍隊なれば年数を経れば星が増える可能性があるが、現在の我々の境遇では新兵さんがやってくるはずもなく、日本へいつ帰れるのかわからない、このままだと二等兵からどんどん死んでいってしまう、せめて日本に帰れる日まで平等にすべきだと腹をきめ、階級章を取り除くことを提案、草田君と二人で作業場や宿舎でみんなに呼びかけていったのです。

先ず草田君と私が星を除きました。賛同者が一人、二人と増えてゆきました。星がないのに気がついた下士官が、誰が軍隊の組織を破壊する行動を取ったのかを調べ、張本人の草田君と私は将校室に呼び出され、下士官数人から不貞の輩呼ばわりで殴る蹴るの仕打ちに遭いました。宿舎に帰った時は二人とも鼻血が出て顔中血だらけでした。昔の軍隊の「気合を入れる」ということです。不思議なもので、私達がそのような目に遭ったことが全員の階級に対する開眼となって、階

級章を取り外してしまい、つけているのは将校と下士官のみになってしまったのです。

この事件はソ連軍の耳にも入り、日本人収容所の中にも反軍闘争が起こったのを理由に、民主的に運営させて、作業の能率を上げるためにも自主運営をしてもよい、将校は別としても下士官は作業をさせてもよい、食料も公平に分配との所長の好意により、自主運営をしてゆくことになりました。シベリアの収容所の中でも第三分所は階級闘争が一番早かったようです。

自主運営を行うために大隊長（後に団長と改称）を選挙で選ぶことになり、その結果私が選任されたのです。その頃の第三収容所の人員は約七百人くらいで、収容所では大きな方の混成大隊だったのです。

日本人捕虜に対しては日本新聞が少し前から発行されていて、ソ連の宣伝や共産主義の礼賛のみの新聞だったのですが、第三分所の事件は良き材料だったとみえ、「第三分所で反軍闘争が起こり、二等兵が収容所の大隊長となって、軍国主義日本人の中に民主主義が理解できつつあり」との記事が出て、日本人になん

か作業意欲を起こさせるために、民主主義が理解できた者から日本に帰させるとの記事の発表と共に、ハラショーラポーターとして、第三分所の草田君を隊長に日本ダモイ一号として日本に向け出発させたのです。これは日本新聞が良き宣伝として利用されたもので、この頃より日本新聞は日本人捕虜の洗脳に入ったのです。

大隊長になってまもなく、第三分所のソ連の政治情報担当将校よりハバロフスクの政治学校へ勉強に行くよう指示を受け、政治将校のストリツ中尉と二人でハバロフスク市へ行きました。学校では、日本新聞の編集者や論説委員等が講師で、毎日共産党誌やレーニン闘争等の本を教科書に特訓が始まりました。分厚い六百頁もあるかと思われる共産党の歴史の本を暗記するのだと言う。共産社会主義の理論を教わるのは全く大変な勉強です。何よりも先ず日本人収容所幹部の洗脳ということだなと理解し、三カ月ほどで第三分所にカムバック。早速三分所を初め附近の労働大隊等の民主運動の元起こしに取りかかりました。

民主グループを組織し、壁新聞を発行するなど忙しい毎日、大隊長と民主グループ委員長を兼務するので大変なことでした。幸いに安河内氏に副官をしてもらってどうか作業の割り当て等を行いました。その頃は移動があつて、五百人の収容所の統制はなかなか大変でした。五月一日の労働者の祭典メーデーには収容所全員を引率して参加し、総指揮官としての任務は大変、一日も早く日本に帰してもらうための努力は大変なものでした。

作業も、身体を第一とすること、落伍者なく仲良く日本に帰り着くまで互いに助け合うことを念願としていたので、ソ連の作業将校のムツエコン氏とは作業の割り当てなどについて喧嘩腰で交渉し、安河内副官と共に粘ったりしました。ある日、本部の当番室より出火、幸いボヤですんだのですが、責任者の私が重営倉に三日入れられたこともありました。ハルビン帰りの女通訳リザー女史の援助でソ連との食糧についての交渉がうまくいき、その後、女史が私に好意を示して、日本への帰国をあきらめソ連に永住しないかと熱心に

くどかれたこともあり、収容所生活は変化に富んだ多忙な毎日でした。

火をつけた民主グループの友の会運動も一年もすると次第に過熱化して、日本新聞のアジテーションにより、若い途な青年達はソ連の高等政治政策教育の影響を受けて、祖国ソ同盟とか、日本に帰ってアメリカと日本の資本主義打倒のために敵前上陸するのだとか、スターリン大元帥に民主主義を教えていただき感謝文を出すのだなどと言いました。私達の最初の目的であつた仲良く一日も早く日本に元気で帰国するということは敗北主義者だ、民主グループに率先参加しない者は反動者である、反動者は日本に帰すなとまで口にするような運動が始まり、それを阻止しようとする年配者との摩擦が出たりもしましたが、他の収容所から比べるとあまり過激にはならなかったようです。

そんな中、大隊長と民主グループは別にする方がいい、ということになり、私は委員長を辞し大隊長の職のみにりましたが、その頃、入ソ以来の神経痛が再

発して歩行や寝返りもできなくなり、再度八八病院へ入院しました。私の入院中に第三分所のなつかしい戦友達は二十三年の春日日本帰国の途についたとの情報を聞き、一緒に帰国できなかったのをベッドの上でただただ残念に思いました。

しかしその戦友達より半年遅れて、山澄丸という船で待ちに待った日本へ帰ることができました。船中では日の丸組と赤旗組とに分かれて一騒動ありました。

舞鶴に着くと、抑留者の収容所で、先に帰国した者の情報で二等兵で収容所の大隊長をしていたことが知れており、大変な取り調べを受けましたが、私は意のあるところを率直に話し、理解してもらい郷里へ帰ったのです。郷に入っては郷に従えの例えのように、何はともあれ私達の第三収容所が他の収容所より死亡者も少なく、あまりトラブルもなく元気で無事帰国できたことは、私の念願が達したものと思います。

第三分所で私の後の大隊長となられた日本軍将校、尾鷲市の宮田清氏、若くして民主グループ委員長をしていた名古屋市の早川進氏、大隊の副官として苦勞し

ていただいた山梨の安河内瑞仙氏、中隊長で抜群のノルマを稼いだ名古屋市の金森治憲氏、一緒に分遣に出かけた神奈川県の高谷利通氏、壁新聞を手伝って下さった富士吉田市の遠山栄郎氏、第八八病院でお世話になった九州福岡県の蒲原輝男氏など……シベリア第三収容所のほとんどの同志と帰国後も交友が続けられ、毎年一回全国各地で行われる「ハラショー会」の会合を楽しみに参加できることは、私の生涯を通じて最大の喜びであります。

暁に祈る、というような日本人同士が苦しめ合った他の収容所からみれば、第三収容所には、味わった苦しきの中に人間同士の血のぬくもりがほのほのと通い合っていたように思えてなりません。今日も元気で、生きていてよかった、の幸福をかみしめながら……。

最後に振り返ってみますと、ソ連軍による「帰国」という欺瞞と死の輸送、そして見さかいのない略奪で始まった六十万余の日本兵のシベリア抑留生活は、日本国が敗戦ゆえに支払わされたあまりにも尊く大きな犠牲と言わざるを得ないと思います。

息さえ凍る寒気のなかで酷使され、飢餓と望郷にうなされて死の足音を聞いた毎日の生活。ダモイを好餌に民主運動なる思想改造を行い、長年にわたる捕虜の強制労働を国家的制裁として行った社会主義国ソ連の民主運動に卑屈なまでに迎合した日本人の民族性が哀れに思えてなりません。

広島、長崎と並ぶ多数の犠牲者が眠るシベリア。死んでいった元兵士たちの無念を黙殺しているのは一体何でしょうか。日本人の誰もが今一度考え直してみなければならぬ問題だと思えます。

私の歩んだ道と抑留生活

愛媛県 上杉朝生

若かりし頃、私は大志を抱いて商売の道に励んでいた。この頃すでに満州事変、上海事変、昭和十一年二月二十六日青年将校が時の重臣を襲撃する（いわゆる二・二六事件）などして、世相はだんだんと軍国化の

道へと変わりつつあった。一旗揚げようとしていた私の夢は破れた上に、東京日本橋を中心にしてますます暗い時代となってきた。

徴兵検査は第一乙種となった。しかし東京神田の研数学館に学びながら、既に自動車の運転免許を取得するなど常に前向きであったと思う。徴兵検査後、一度郷里の三重県津市に帰り再度上京、その時、満州国、朝鮮、樺太の警察官募集の広告を見た。当時は警視庁で受験することができた。私は旅順、大連を勤務地とする希望もっていたところ、試験場を間違えて朝鮮総督府の試験を受けてしまった。合格発表を聞いてビックリ、係官は笑って京城へゆくように指示された。余談になるが、京城までの旅費を口頭で請求したところ、身元調査のうえ、採用が決まれば京城で旅費が支給される規定のようであった。急遽千葉の兄（高射砲連隊の将校）を訪ね借金を申し入れたところ、兄は他の将校連中の金をかき集めて、「必ず返せよ」と言い、私は昭和十三年の暮れに京城へと旅立った。私は二百人の新生を代表して入校の申告をした。